



👁️👁️ みどころ

中国では「白髪三千丈」という表現もOKだが、「湯を沸かすほどの熱い愛」は日本ではちょっと誇大表現・・・？いやいや、末期ガン宣告を受けた宮沢りえ扮する肝つ玉母ちゃんの奮闘ぶりを見れば、それは誇大ではない！

どこの馬の骨ともわからない若手監督(?)の商業映画デビュー作に、宮沢りえ、オダギリジョー、杉咲花等のビッグネームが即決で参加。その理由はオリジナル脚本のすばらしさにあるが、さまざまところで予想を裏切る演出もすばらしい。

山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズは血のつながった家族の物語だが、本作の家族については、血のつながりの視点から検討するのも面白い。

涙をいっぱい流しながら、「湯を沸かすほどの熱い愛」をしっかりと確認したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■オリジナル脚本に拍手！舞台は銭湯、テーマは家族！■□■

私は昨今の原作ばやり、コミックばやりの邦画界の中で、『繕い裁つ人』（15年）（『シネマルーム35』未掲載）や『少女』（16年）の三島有紀子監督がオリジナル脚本にこだわっていることに感心していたが、本作が商業映画デビュー作となる中野量太監督も、オリジナル脚本にこだわり、本作の脚本を約1年かけて書き上げたい。本作のパンフレットにはその「シナリオ採録」が収められているから、大いに参考になる。

本作の舞台は、「幸の湯」という名の銭湯。所在地（県、市）は明らかではないが、まちの規模から見てどこかの地方都市らしい。私は平成元年からホテルのフィットネスクラブ

に入会し運動とサウナを続けているから、ほとんど家で風呂に入らないし、銭湯にもほとんど行ったことはない。しかし、四天王寺のマンションに住んでいた頃は、すぐ近くに銭湯があったから何度か行ったことがある。また、いわゆるスーパー銭湯には南河内郡美原町のニュータウンにある一戸建てに住み、車で移動していた当時は時々行っていたが、銭湯に行ったのは中学生の時からだ。現在住んでいる大阪市都島区の自宅近くにも銭湯があり、1度行ってみたいとは思っているが、まだ実現していない。それはともかく、地方都市なら今の時代でもまだ銭湯の経営が成り立つのかなと思っていると、何のことはない本作冒頭には「湯気のごとく、店主が蒸発しました。当分の間、お湯は沸きません。幸の湯」と書かれた張り紙が・・・。

パンフレットにある中野量太監督のインタビューによると、日本映画学校（現：日本映画大学）出身の中野量太監督は16年前の卒業制作で初めて撮った映画の舞台が銭湯だったため、その当時から「家族経営で湯を沸かす営みや他人同士が一緒に湯船に入り共に癒される感覚、富士山のペンキ画や薪を燃やす大きな炉など、心惹かれるものを感じていました。」らしい。その結果「家族愛や人の繋がりをテーマにしている僕にとって、銭湯は最適な舞台だったのかもしれない。」と語っているが、さて本作の出来は？

■□■なぜ、宮沢りえや今をときめく俳優陣が総出演？■□■

宮沢りえと中野量太監督は共に1973年生まれだが、同級生として共に過ごしたわけではなく、たまたま同じ年というだけ。したがって、なぜ宮沢りえのような大女優が、中野量太監督のようなこの馬の骨ともわからない(?)新人監督の映画に出演したの？彼女は送られてきた脚本を読んで、中野量太監督がそれまでに試験的に(?)作っていた映画も観ないまま出演を決めたらしい。その理由は、「脚本が面白かったから」だそう。宮沢りえはブルーリボン賞主演女優賞を受賞した『父と暮せば』(04年)、『シネマルーム4』288頁参照)の名演技が光るが、東京国際映画祭最優秀女優賞ほか多数の賞を受賞した『紙の月』(14年)、『シネマルーム35』108頁参照)では、悪女役もしっかり板についてきた。しかし、中野量太監督が自ら書いた脚本で主人公となる女性・幸野双葉は、末期ガンで余命2カ月の宣告を受けながらも「家族のためにやるべきことがある」という姿勢を崩さない強い女性。そんな双葉役に今の宮沢りえはまさにピッタリだ。

驚くべきは、突然蒸発して家業の銭湯を休業に追い込んだ夫の幸野一浩役を、ビッグネームのオダギリジョーが演じること。2人の娘で高校生の幸野安澄役も、NHK連続テレビ小説『とと姉ちゃん』(16年)の主人公の妹・小橋美子役で大フィーバーした杉咲花が演じるからこれもすごい。さらに、今や若い女性に大人気の松坂桃李が本作中盤には女だけの三人旅の中に割り込む形で登場し、ラストでも重要な役割を果たす若者・向井拓海役で登場するからこれもすごい。自分の書いた脚本で商業映画デビューを飾るについてこれだけの豪華俳優陣がそろえば中野量太監督はさぞ嬉しいことだろう。

豪華俳優陣の出演料を含めて本作の製作費がいくらかかったのかは知らないが、本作は公開前から結構評判がいいので、しっかり興行収入を挙げて製作費を回収し、中野量太監督には次回作も頑張ってもらいたいものだ。

■□■導入部は失踪、いじめ、末期ガンの三重苦から！■□■

「幸の湯」は薪でお湯を沸かす昔ながらの銭湯だから、その責任者である夫の幸野一浩（オダギリジョー）がふらっと出奔してしまえば、休業はやむをえない。また、家業は当面休業しても、パン屋のパートで働いている幸野双葉（宮沢りえ）の姿を見れば、家賃を払わなくてもいい自宅がある以上、母娘2人で食うことぐらいはできそう。しかし、本作導入部では制服姿のかわいい高校生の幸野安澄（杉咲花）が学校で陰湿ないじめを受けている姿が映し出されるから大変。もっとも、湊かなえの原作を映画化した『告白』（10年）はいじめをテーマにした長編作だった（『シネマルーム25』51頁参照）が、本作のいじめは中盤以降の家族の物語を導き出すための導入部にすぎない。したがって、そのレベルはかなり深刻だが、いじめの一環として盗まれた制服も双葉の励ましを受けた安澄がしっかり自分自身で立ち向かうことによって取り返すことができるので、ご安心を。

導入部で何よりも深刻なのは、双葉が末期ガン宣告を受けること。私自身本作鑑賞の1カ月前に胃ガンの宣告を受けて（1Bレベルの初期だから、胃の3分の2を切除する定型手術だけでOK）手術日を決めた後、更に血清アミラーゼの数値が高いと膵臓ガンの疑いがあると知ってビックリし、いろいろ医師に確認したところただだに、双葉が膵臓ガンが全身に転移した末期ガンで、医師から余命2、3カ月という宣告を受けるシーンでは、思わず目を背けることに。ヘレンケラーは見えない、聞こえない、話せないの三重苦だったが、本作導入部で双葉に訪れる三重苦は夫の失踪、娘が受けるいじめ、そして末期ガン宣告。もちろん、もっとも深刻なのは末期ガン宣告だ。

お湯を張っていないカラの湯船の中で双葉は一人泣き続けたが、安澄から夕飯を催促する電話が入ると「・・・お母ちゃん決めた、今から安澄のために、超特急で帰っておいしいカレー作る」と力強い言葉を。こんなセリフを語る時の宮沢りえはホントにカッコいい。私も切り替えは早い方だが、双葉はもっと早いようだ。双葉に残された命はあと2、3カ月。ならばその間に双葉が「絶対にやっておくべきこと」とは・・・？

■□■高足ガ二の「伏線」はお見事！■□■

末期ガン宣告の日から、安澄が「絶対にやっておくべきこと」と決めたのは、①家出した夫を連れ帰り、家業の銭湯を再開させる②気が優しすぎる娘を独り立ちさせる③娘をある人に会わせる、の3つ。もちろんこれはスクリーン上にそのまま見せてくれるわけではなく、うまく要約しているパンフレットの文章をそのまま使ったものだ。また、①と②はストーリー展開を見ていると、すぐにわかるが、③はさて・・・？

本作は125分と商業映画デビュー作にしては少し長めだが、その中には本筋のストーリーの他さまざまなサブストーリーが散りばめられているうえ、なるほどこれがあの話の伏線だったのかと感心する「伏線」がいくつも埋め込まれている。その最大のものが、双葉と安澄が2人で高足ガニを食べるシーンだからそれに注目！私は上海ガニやタラバガニよりズワイガニの方が圧倒的に好き。そのため、冬場は毎日のようにカニ鍋を食べているが、本作に登場するのはタラバガニより更に大きい高足ガニ。私は全然知らなかったが、これは世界最大の甲殻類で、駿河湾の深海で採れる貴重なカニで、生きた化石とも言われているようだ。

2人の会話では、このカニは双葉が買ってきたものではなく、毎年4月25日に酒巻君江という女性からクール宅急便で送られてくるものらしい。今年も双葉が安澄に読ませた手紙には、「皆さん、お元気でお過ごしでしょうか？今年も良い高足ガニが穫れましたのでお送ります。4月25日、酒巻君江」と書かれてあった。そして、そのお礼状は安澄が書くのが「わが家のルール」。その理由は「形式ばったお礼書くより、子どもが自由に書いた方が貰った人は嬉しいでしょ」だそうだから、なるほど、なるほど。

多くの人はこのシークエンスを見てすぐにそう納得してしまうはずだが、実はこの会話は後にあつと驚く家族の物語に展開していく大きな伏線になっているので要注意！もっとも、ここまで書くのがギリギリの説明で、これ以上書くのは厳禁！

■□■夫が戻ってくると、なぜか急に4人家族に・・・■□■

42年間弁護士稼業をやっている私は、いわゆる「探偵」をあまり信用していない。しかし、本作に登場する39歳の子連れ探偵・滝本（駿河太郎）は調査能力も人柄も料金も信用できそう。滝本の調査よろしきを得て、一浩がとなり村に住んでいるとの報告を聞いた双葉は、直ちに一浩のアパートを訪れることに。アパートのドアを開けて一浩の顔を見るや否や、台所にあったお玉で彼の頭をポコンと叩き出血させてしまう行為は、いかに気丈な双葉と言えどもいかなもの？いやいや、ここでは双葉の一浩に対する怒りやイライラがそれほど大きかったと理解すべき・・・？

それはともかく、そこで気楽に料理を作っていた一浩の説明によると、一浩がここで一緒に暮らしているはずの若い女は既に自分が産んだ女の子・片瀬鮎子（伊東蒼）をアパートに残して出ていったらしい。そのため、末期ガンのことも説明した双葉は一浩を家に連れ戻したが、一浩が若い女との一夜の浮気によって生まれたという鮎子も一緒に連れ戻してくることに。夫が戻ったことによって幸野家は3人ではなくいきなり4人家族になったわけだ。そのため、突然妹ができたと言われた安澄も突然姉さんがいるよと言われた鮎子もキョトンとしたが、それでも4人家族の新たな生活が始まることに・・・。

■□■中盤のハイライトは、「読み」をはずして・・・■□■

本作中盤のハイライトは、赤いレンタカーに乗っての女3人の旅。その表向きの目的は高足ガニを食べに行くことだが、双葉が狙う真の目的は子供たちに末期ガンの真相を打ち明けること。双葉が一浩に「全部話してくるね。大丈夫、きっと分かってくれる」と言い残して旅立つところを見ると、誰でもそう思うはずだ。ところが、中野量太監督の脚本はその読みを見事にはずしてくるので、そこに注目！

私は、何度か家族旅行で兵庫県香住町の民宿に一晩どまりで松葉ガニ三昧の旅行に行ったことがあるが、おいしい松葉ガニをたらふく食って、寝て、また食っての旅は大満足だった。しかし、双葉たち女3人連れが高足ガニを食べるのは海辺にあるレストランでの昼食だから、それほど豪華さはない。それはともかく、その注文取りに来たウエイトレスの女性がろうあ者で、手話によって注文をとっていたのは少し違和感があったが、実はその女性こそあの酒巻君江（篠原ゆき子）だった。それなら、注文を取りに来た時に紹介してくれればいいのに……。当然安澄は双葉に対してそう言ったが、それに対する双葉の答えは……。？これ以降のあつと驚く、見事に「読み」をはずした展開はお見事で、大いに涙を誘う感動シーンになっているので、それはあなた自身の目でしっかりと。

■□■ちょっと膨らませすぎだが、いい感じ！■□■

他方、そんな重いストーリーばかりではしんどいだろうと気を効かせた(?)中野量太監督は、途中で立ち寄ったドライブインで厚かましく双葉の車に乗り込んでくるヒッチハイクの若者・向井拓海(松坂桃李)を登場させるので、これにも注目！若者は旅の中で成長するもの。「僕は赤い車が好きなんです。このパーキングに赤い車はこれ1台だけです。だからこの車に乗せて下さい」という奇妙な「三段論法」でシャーシャーと双葉にヒッチハイクを願い出る拓海の姿を見ていると、それがよくわかる。「北海道からヒッチハイクで来た」というのがウソなら、「好きな車の色が赤」というのも真っ赤なウソ。車の中で拓海は「好きな車の色は都合により変わります」と自白し、「何でもお見通しだ」と双葉の観察眼に感心せざるをえなかったが、しばらく一緒に旅をしていると拓海が今風のいい若者であることがよくわかる。ヒッチハイクの中で50歳位の女トラック運転手さんに乗せてもらったところ、「国道走ってたらいきなり左折して、えっと思ったら、ラブホに入って行って」と、2人の子供を含む女3人に面白おかしくきわどい話をする話術も相当なものだ。こんな挿話も少し膨らませすぎだがいい感じ。そんな風に思っていると、別れ際に双葉から「あなたはこれから、日本の最北端を目指すの」「それがたった今からあなたの目標」と明確な目標を与えられた拓海は、本作ラストに再度登場して重要な役割を果たすので、それに注目！

■□■遂にダウン！その中で更なる家族の真実が……。■□■

余命2カ月の宣告と同時に、治療方法はなく緩和ケアだけです、と宣告されると普通は

そのまま入院するはずだが、これまでの展開を見る限り、双葉はとにかく活動的。湯船の掃除から車を運転しての女3人の旅行まで元気にこなしていたが、双葉はその旅先でついダウン！緩和ケアセンターに入院した後の双葉は急速に弱っていくが、そこで再度滝本探偵が登場し、その調査よろしきを得て双葉の母親をめぐる新たなストーリーが展開していくのでそれにも注目！

いかにもノーマンに見える拓海の告白(?)を聞くと、拓海も意外に複雑な家庭環境で育ったことがわかる。そもそも、一浩が家に戻って銭湯を再開した後、双葉がいきなり2人の子持ちになったのが変なら、高足ガニを食べに行った先で出会った君江の登場によってあっと驚く家族の真実が明らかになるから、中野量太監督が本作で描く家族関係は複雑だ。そのうえ、滝本探偵がもたらした新しい情報によって、既に車椅子でしか動けなくなっていた双葉が滝本探偵の車に乗せてもらって双葉の母親だという女性の家を訪問してみると……。ここでも話を少し膨らませすぎでは?の感があるが、中野量太監督が家族をテーマに描くことにここまでこだわっていたのかということがよくわかる。

日本の最北端まで行ってきたという拓海がおみやげのじゃがいもを持って双葉の家を訪れ、お湯沸しの手伝いをするようになると、いかにも双葉の新しい家族がまた増えたような感じだが、さて双葉の血を分けた家族は一体誰?もともと、血を分けた者だけがホントの家族?あえてそう考えてみると……。

■□■エジプトに行けなくとも、人間ピラミッドがあるさ!■□■

9月20日に観た『オーバー・フェンス』(16年)を観れば、どことなく頼りなさげな男を演じるオダギリジョーの演技はピカイチ(『シネマルーム38』66頁参照)。それは本作を観ても全く同じだ。なぜ双葉のようなしっかり者の女がこんなダメ亭主と一緒にいるのか不思議だが、世の中にはそういう組み合わせが多い。末期ガン宣告を受けた双葉に対して「何か望みはないか?何かして欲しいことはないか?」と尋ねるのは、この手の頼りないけれども心は優しい男の常套手段だが、それに対して双葉が「それなら、長年の夢であるエジプト旅行に行ってピラミッドを見てみたい」とハッキリ望みを言うと一浩は「そりゃちよっと……」とたじたじ状態に。それに対して双葉は「冗談よ」と笑ってごまかしたが、ホントは冗談ではないことは明らかだ。そんな「伏線」を受けて、ある日一浩が食事中の家族(と言っても、今や幸野家の食卓を囲んでいる誰と誰がどのように血がつながっているのかは、よく考えなければわからなくなっているが)みんなに、「あ～、みんなに、お願いしたい事がある……今晚だけ、付き合って欲しい。バカだって事は分かっている、けど、これしか思い浮かばなかった」と言いながら、土下座して頼んだこととは……?

近時、学校の「組身体操」での事故が多発し社会問題になっているが、本作に見る人間ピラミッドは下段が拓海、一浩、滝本探偵という3人の男、中段が安澄と君江、そして上段は鮎子だから、うまくバランスがとれている。したがって、これなら崩れることはなく

大丈夫・・・？双葉の携帯メールが鳴り、「from安澄：今はこれがお父ちゃんの精一杯だって（笑）ゆっくりでいいから外を見て！」の文字を見て双葉が病院の窓を開けてベランダに出て中庭を見てみると……。エジプトに行けなくとも、人間ピラミッドがあるさ！そんなシーンにどっと涙が……。

■□■こんなお葬式もグッド！煙突から出る煙の色は？■□■

近時は結婚式も職場の上司や同僚を招かず、親戚と親しい友人だけでやってしまうケースが増えているらしい。そう考えればお葬式だって決まりきった形式でやらず、実家が銭湯なら富士山を描いた湯船に祭壇を設けて、富士山を見ながらのお葬式もいいのでは？また、お経だって必ずしもお坊さんを招く必要はなくテープを流せばそれでいいのでは？本作ではそんなユニークなお葬式が登場するので、それに注目！

また、遺体を入れた棺を霊柩車に納めれば、後は焼き場に行ってお焼くだけ。しかし、それだって一本道で行かず、途中でお弁当タイムを入れ、家族みんなで故人を偲びながら楽しくお弁当を食べる時間を入れてもいいのでは？それが無茶なことか、駄目なことかは遺族が自由に判断することだ。家族はもちろん、焼き場まで同行していた拓海や滝本探偵も喪服を着ていたが、その表情は決して暗く悲しいものではなく、ホントに死ぬ直前までみんなのことを考えていた双葉の生きざまに共感し、その思い出を語りながらお弁当を食べる姿は明るく楽しそうだ。しかして、焼き場の煙突から上がる煙の色は一体何色？

さらに、本作に見るお葬式の続きは、焼き場から戻ってきた全員があったかい幸の湯に浸かること。銭湯は男女混浴ではないからそこらあたりは遠慮気味だが、家族のために命を燃やし尽くした双葉への供養のためには、きっとこれが一番だ。そんなラストシーンの後にスクリーンに大きく表示されるのが、本作のタイトル「湯を沸かすほどの熱い愛」。これを見て、思わず涙がどっと出てきたのは私一人だけではないはずだ。宮沢りえの熱演に拍手！そして、こんなすばらしいオリジナル脚本を書き、すばらしい演出を見せた中野量太監督に拍手！

2016（平成28）年11月5日記